
i m i t a s i o n - f l o w e r

かりんとう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

imitation-flower

【Nコード】

N5846L

【作者名】

かりんとう

【あらすじ】

二人の少女は互いの幸福の絶頂で死んだ。一人の少女は死にたくないとして強く願った。生き返った後の残酷な結果を、その代償が何なのかも知らずに。彼は絶望の中一人残された。目の前の憎むべき現実と共に。

序章（前書き）

皆様に呼んでいただけたら幸いです。
よろしくお願ひします。

序章

春ももうすぐ過ぎようかとする庭園で小鳥が集いそうな声がする

「ねえあなた。私が年をとって、おばあちゃんになっても愛してくれる？」

しわ皺のよぼよぼのおばあちゃんなの」

辺りに咲く花さえ霞んでしまいそんな愛らしさの少女。

「君が皺皺のよぼよぼのおばあちゃんだったら、僕も皺皺よぼよぼのおじいちゃんさ。

僕たちは変わらないよ。変わらず愛している」

少年から、青年へと階段を上ろうとする若木のように美しい少年。

二人は思わず周りが照れくさくて叫びたくなるような話をしていた。

「じゃあ、私が別人になっちゃったら？すごく性格が最悪なの。あなたが他の誰を見るのも嫌で、四六時中べったりなのよ。束縛しまくりなの」

「それは返って嬉しいかも……。君の最悪ってその程度？それなら僕は君を連れ歩こう。片時も離れることがないように、ずっと手をつないでいよう」

「だったらすごく楽しいわね。天国も一緒にいけるわ」

「今も、これからもずっと一緒だよ。来世があるならその来世さえ。」

きみこそ僕が嫌になるかも・・・」

「そんなことありえないわ。私はあなたの何もかもを愛してる。そのつややかな銀の髪も。吸い込まれそうな蒼の瞳も。甘い言葉を紡ぐ唇も。私を抱く腕かひなも。抱きつきたくなる広い背中も。」

「僕もその輝く黄金の髪や碧の瞳、どんな甘露より甘い唇に、僕のためにあつらえたかの様に腕に添う身体も。何より君のそばにいると幸せを感じるし、優しいが時に僕を振り回す性格も、何もかもを愛しているよ」

「私、あなたのためなら何でもできるわ。きつと空だって飛べる。」

「じゃあ僕は君のために争いのない世界を創ろう。きつと君のためなら世界をこの手にできる」

「ふふ。私たち無敵ね。でも怪我したらやあよ?」

「大丈夫さ。怪我したら君が付きっ切りで看病してくれるんだろう?」

「もちろんよ。私の手料理だって振舞っちゃっわ」

「・・・」

「なあに?その微妙な顔」

「君の手をわずらわせなくても、我が家には料理人がいるから大丈夫だよ」

「手料理は食べられないってこと？」

「……………」

「ふ~~~~ん」

「つぶ。だって君の作るものは芸術性に富みすぎて、キッチンが壊滅してしまっじゃないか!!」

「練習するわ! そのころには上手になるもの。そのころ後悔しても遅いんだからね!!」

「ごめんごめん。愛してるよ」

「……………」

「君が料理ができなくても大丈夫。美味くなるまで待てるだけの時間があるだろう？」
僕たちはずっと一緒だよ」

「…………それだけ？」

「きみ意外見えない」

「ふふ。後は？」

「結婚しよう」

「けっこんね」

「受けてくれる？」

「結婚?!」

「ああ。これからも、僕の隣にいて欲しい。互いの気持ちだけでも充分だけれど、世間のみんなに僕のものだと言わせてくれ」

「.....」

「ジュリア？」

「嬉しい」

「え・・・」

「嬉しい!! って言ったの!! ああ、ハイル愛してるわ!! 私あなたの奥さんになれるのね!」

「僕が成人する秋がきたら、義父ハイル上に挨拶に行くよ。そしてきみの大好きなカルニ―チエの花が咲き乱れる春に式を挙げよう」

「素敵ね。一年経てばあなたの伴侶になれるのね」

「たくさん僕の子供を生んでくれ」

「もちろんよ。幸せな家庭を築きましょうね」

美しく咲き乱れる花々に囲まれ、二人は箱庭で永遠を約束した。それは、世界に互いだけしか見えない二人の、幸せすぎる誓い。

誰もが温かくて、思わず微笑んでしまうような幸福な風景だった。

序章（後書き）

平行連載中の話もよろしくお願いします

1・ある少女の人生（前書き）

序章とは違う女の子の人生です

1・ある少女の人生

人生において、幸福と不幸の分量は決まっているのだと言う。もしもそれが本当なら、私の人生、これからは幸福がいっぱいなのだと、希望をもてるだろうか……

人生17年。

他人はまだあきらめるには早すぎると言うのかもしれない。

努力が足りない^{ひと}と決め付けるかもしれない。

眼を外の世界に向ければ可能性は無限大に広がっているのかもしれない。

それらは本当のことだろうし、実際に私が今いる環境は狭い限られた空間だ。

けれど、若干17歳の私には、この狭い世界がすべてだった。

思い返せば、生まれたときからけちがついていたように思う。

出生3日にして捨てられ、孤児になった。

両親は駆け込み出産をしたあと、すぐに姿を消したのだと言う。

歳若い男女だったそうだ。

経済的に貧しかったのかもしれないし、できたはいいものかどうか分かったのか、それともそもそも望んでできた子供

ではなかったのかもしれない。

どれをとつても人生の始まりとして遠慮したいところであるが、私的には最初か二番目がいい。

自分が疎まれて生まれ来たとは思いたくない。

その後、近くの孤児院へ渡され12歳までを過ごした。

お世辞にも裕福とか、恵まれているとか言いがたい環境だったがご飯は三食食べられたし、使い古しだったが服もあった。6畳ほどの部屋に6人ですぐすと言う狭小で、プライベートなど無きに等しい環境も、当たり前前すぎて疑問も浮かばなかった。

しかし、いつからだろう、8歳か9歳ごろだったかな。普段みんなの面倒を良く見ていた男の子がいた。その子は中学にあがる直前に両親が離婚し、そのどちらも彼を引き取ることを拒否したため孤児院へやってきた。

背景を思えば、彼は優等生過ぎるほどに『良い子』だった。

進んで下の子の面倒を見て、職員の仕事を手伝い、丁寧な挨拶をする子だった。

しかし、傷ついていないはずがない。

思春期の子供が親に要らないと存在価値を否定されることに、誰にも甘えることができず、すべてが今までとは違う環境に、何も感じないわけがないのだ。

それを彼は何も感じさせなかった。

周囲の評判はすこぶる良く、誰からも好かれる子だった。

始めは私もみんなに混じってその子に遊んでもらっていた様に思う。

何がきっかけだったのか、それとも私が悪かったのか。

その子が孤児院に来て半年ほど経ったころから彼は私に固執するす

るようになった。

みんなの前では気づかれないうちに少しずつ闇は濃くなっていき・
。。

誰かの目がなくなったとたん、彼は変わった。

やたらと身体を撫で回し、服を脱がせるといふところを舐めまわした。

嫌がったり、少しでも抵抗しようものなら、普段服を着ていれば分らないようなところを抓つかり、耳から毒のような言葉を流し込んだ。

『お前は誰からも愛されない疎まれた子供』

『みんなお前のことが嫌いなんだ』

『汚い、穢れた存在』

『存在自体が間違っている』

最初から愛を知らないのと、愛を突然取り上げられるのと、どちらがより不幸なのだろうか。

今考えれば、彼こそが一番それを考えていたのかも知れない。

自己の存在否定を。

孤独を根底に抱えている子供にとって、否定されることは何よりも辛い。

それを覆す言葉を持たないのだから。

繰り返される自己否定に、私は身を守る方法を持たなかった。

否定の言葉を聴きたくなくて、人と距離を置いた。

一度疑念を抱けば、笑顔や優しい言葉は全て偽りに見えた。

孤児院は忙しく、子供は私だけではない。

徐々に扱いにくい子供となる私に、初めは声をかけていた職員も近寄らなくなっていく。

寂しいのに、否定を思うと怖くて傍にいくことが出来ず……。

完全な一人になったとき、そのときを待っていた彼は近づいてきた。

かいがいしく少女の世話を焼き、根気良く話しかける。

その姿はさぞ美しいものだっただろう。

孤独な少女を気遣う心優しい少年。

その裏でどんなことをしていようともしない。

孤独に脅える心を洗脳していく。

『お前を触れるのは自分だけ』

『汚いお前を綺麗にしている』

『お前のためにこうしているんだから、拒んではいけない』

自分の存在価値が見出せず、孤独に脅えた私は……

淫猥で、墮落した営みが再開しても、もう拒めなかった。

3年間、それは続いた。

行為は執拗になり、エスカレートしていく。

彼は15歳。私は12歳。

その日いつものように物置に連れ込まれ、身体を好きにされていた。

彼は巧妙で、誰が来てもすぐに偽装できるよう、必ず服は脱がなかつたし、脱がさなかつた。

古びた服の隙間から手を這いまわし、舌を入れる。

人形のような私は微動もせず、11歳の時に処女を失っていた。

何の知識もない、おかしいと思えるような感情もそのころには浮か

ばない、ただただされるがまま。

永遠に続くかと思われた悪夢はしかしあっけなく露見する。

お兄ちゃんに遊んでもらおうとした10歳の男の子によって。

孤児院は騒然とし、開設以来前代未聞の不祥事に慌てふためいた。「この子から誘われた」

決まり文句のように彼は言った。私は口も開けなかった。

事情聴取も、事実の解明さえなく、普段の信用がものをいうのか、それとも汚いことから眼を逸らしたかったのか、誰一人として彼の言葉を否定せず、私の心配さえせずに。

ただ汚いものを未知なる物を見るかのような目線で私を見て、私だけをそこから排除した。

その後施設を点々としたが、一度付いた穢れはとれないとでもいうのか、同じようにことは起きた。

施設の子供だったり、職員の人だったり、果ては学校の同級生まで。

望まない行いの代償か、閉じた心への救いなのか・・・幸いなことに17になる今も本当の意味で女になってはいない。

同じ年頃の女の子が次々とそれを迎え、女性らしい身体へ成長していく中一人取り残されたかのように、私の身体は沈黙していた。

17になつてすぐ、私を引き取りたいという奇特な夫婦が現れた。

高木智さんと洋子さんの43歳の夫婦は長年子供に恵まれず、養子を取ることを選んだのだそうだ。すでに私と同じような子供がひとり引き取られていた。

11歳のそのこは健斗くんといって、たいそう愛らしい男の子。健斗君がお姉ちゃんが欲しいといい、たまたま見に来た施設に私がいた。

「一目見てあなただと思った」といつてくれたこの一家とすごした2年は、私にとって一番の幸せだった。

実の子供のように私を愛してくれ、時には姉妹のように寄り添って服を選んだ。不器用な私に、懇切丁寧に料理を教えてください、遠慮なく笑ってくれた。健太君は他人などと思うひまがないほど甘えてくれ、体育祭、文化祭だって当たり前のように一家そろって来てくれた。こつちが照れるほどの愛情表現は凍った感情を少しずつ溶かし、時折であったが笑えるようになった。

愛し合う夫婦に、仲の良い姉弟。

休みの日は家族で過ごし、あれやこれやと出かけもした。

『卒業式には着物で参加するわ!』と意気込んでいた洋子さん。

『ビデオまわすから、一番いい席を教えてください!』とわざわざ休みを取ってくれた智さん。

『お姉ちゃんが一番だよ!』と幼いながらお世辞で気分を盛り上げてくれた健斗くん。

初めて、学校行事が楽しみだと思えた。

明日が来るのが待ち遠しいとやっと思えるようになった。

行ってきますとお帰りなさいがこんなに幸せなものだとみにしてみた。

大切な大切な私の『家族』。

「ちゃん車気をつけてね!あとからばつちりきめて智さんと、健斗くんと駆けつけるからね!」

卒業式の日暖かい言葉を受け、『家』を出た。

「行ってきます。みんなの姿を待ってますね」

学校まで歩いて20分ほど。学校なんて愛着も何もないけど、今日に行くのが楽しみだった。

卒業式の終わった春には、家族旅行に行く計画で。

卒業式の紙花に縁取られたたて看板、中では嬉しそうに歩む学生が見える。

横断歩道を渡れば、私もあの中の一員で・・・

キイイイ

ッ、ドンッ

視界が回る。

「生徒が轢かれたぞ!!」

「キャアアア」

「大丈夫か?!」

「おい!! 誰か救急車を!!」

なぜだか卒業式の看板が赤く見え。

みんなが叫んでる。

聞こえない。

何を言ってるの？

「おい! 大丈夫か!?! すぐに救急車が来るからな! 死ぬな! 頑張れ

「!!」

死ぬ？

私は死ぬの？

嫌だ。

絶対嫌だ・・・!

智さん、洋子さん、健斗くんみんなが待ってるのに。

今日を楽しみにしてきたのに。

明日が待ち遠しいのに。

まだ死にたくない・・・!

家族と一緒にいたい!!

悲しませたくない!!

想いと裏腹に、身体力はどんどん抜けていく。

体の下から広がる赤い血の海。

眼から光が遠のいて。

「救急車はまだか!!」

誰か・・・助けて・・・

「おい!おい!?!」

「心臓マッサージ!!誰か手伝え!!止まったぞ!!」

閉じることできない眼から一筋の涙がこぼれ・・・。

不幸な少女の17年は2年の甘い生活を経て、最後に死にたくないと思わせたかったただけだと言うように、こうしてあっけなく幕を閉じた。

少女にとっての幸福の絶頂で。

そして物語はここから始まる。

互いに幸福の絶頂にいた少女たちの死によって・・・

1・ある少女の人生（後書き）

人の幸せの定義ってなんだろうなと思います。些細なことでも、本
人が幸せだと思えたら、きっとそれが一番ですよね。

彼女と彼女と彼（前書き）

前回から二ヶ月も過ぎました。
覚えていますでしょうか。

彼女と彼女と彼

失うばかりだった主人公がひとつの世界に別れを告げる
戻れないのなら永遠に目覚めたくない

彼女の願いは切実でだからこそ残酷な結果を生んだ

彼女が再び目覚めたとき

その身体は他人のものだった

彼は愛する人を失った。

愛する人との幸せの絶頂の中で。

何よりも大事だった人と引き換えに生き延びる

彼の愛する人はもういない

いるのは愛する人の姿をした別人

憎むべき相手だった

彼女は幸せの絶頂の中で死んだ

後悔も思い残しも何もなかった

旅立ちに幸せな思い出と愛する人の心を両手に抱え

彼の幸せを願って逝った

それがどんなに残酷な願いだったかも知らずに

彼女は命と引き換えに愛する人の無事を願った

彼女は何も知らずに出会った人に憎しみに満ちた目を向けられた

彼は引き換えとなった代償を、それを呼び込んだ状況を憎んだ

自分の手さえも見えない闇の中、一人の少女がまどろんでいる。

少女にとって、闇は恐れるものではなかった。

闇は少女の身体を包み、心を慰撫する。

ここでは何も考えなくてもいい。

不安も苦しみも差別も悲しみもなく

何にも脅えなくていい。

何にも考えなくていい。

思い悩む必要さえない。

喜びも、希望さえも無かったが少女にとってはどうでもいいことだ。

元に戻れないのなら、何も必要ない。

ただ眠りの中で癒されたい。

このまま

消えてしまいたい。

もう存在しないからだの受けた衝撃に、

あるのか分からない心が叫んだ悲しみに、

疲れきってしまったから。

今はただ、なにかもを忘れて、何も見ず何も聞かず、自分さえも
忘れ……

闇の中に沈みこんでしまいましたかった。

どうして・・・

どうしてこんなことになってしまったのか。

何が悪かったのだろう。

何を間違えていたのだろう。

聖堂の中は、ステンドグラス越しに眩いばかりの光の中に包まれて
いるというのに。

ガラスの中には聖母子が慈愛をこめた微笑を浮かべているのに。

彼の心の中には、絶望という名の暗黒が支配していた。

腕の中で眠る愛しい人。

永遠を誓い合うひと。

幸福の中で微笑んでいるはずの彼女は、今眠りの中にいる。

その顔は今にも起きそうで

少し上がった口角が幸せな夢をみているのではと思わせる

来年着るはずだった純白の衣装に身を包み

実はこちらを謀るために図ったいたずらなのではと

淡い希望を抱いてしまう

「今ならまだ怒らないよ。寂しかったんだろう。僕も会えなくて寂しかった。きつい戦いだったけど、無事に帰ってきたよ。約束どうりに式を挙げよう、これからはずっと一緒にいられる。もう離れなくて良いんだよ。だから起きて、僕に君の青く澄んだ瞳を見せて、愛する声で僕の名を呼んで」

ひっそりとした協会には男の声だけが空しく響く。

彼は少女を抱く腕に力をこめ、握り返すのを待つかのように手と手を重ね

御伽話のようにその身をその唇を重ねた。

しかし、彼の願いが届くことは無かった。

腕の中の彼女の熱は失われ、二度と彼に微笑むことも無かった。

彼女と彼女と彼（後書き）

これからもきつと鈍亀更新のような気もしますが、よろしくお願
い
します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5846/>

imitation-flower

2011年1月27日00時31分発行